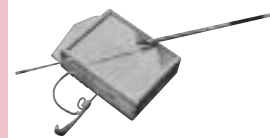


財団だより

第112号

2006.12

多摩川



ひっかき竿と箱眼鏡
青梅市郷土博物館蔵



写真撮影 伊藤 信男(いとう・のぶお)
世田谷区代田在住

たまがわの生きものたち

ユリカモメとヨシ

多摩川は、バードウォッチングのナイススポットのひとつに数えられています。いろいろな冬鳥が渡ってくる秋から冬が特に最適なシーズンと言えます。ユリカモメ(チドリ目カモメ科)はその代表格で、知床半島、アリューシャン列島あたりから冬鳥として飛来し、10月頃から翌年の4月頃まで目にすることができます。体長40cm程度とカモメ類の中では小ぶり、全体に白色、嘴と足が赤く、目もつぶらなため、きれいな鳥という印象があります。その昔、在原業平をして京に残した恋人を偲ばせ、「名にしおはば いざ言問はむ 都鳥・・」と、かの名歌を詠ませたのがユリカモメであったとされ、その由来から、東京都の鳥として指定されています。カモメ類としては珍しく内陸の湖沼や河川にも飛んでいきますので、多摩川では登戸の二ヶ領宿河原堰付近まで、その姿をみることが出来ます。

ヨシ(イネ目イネ科ヨシ属)は別名アシ(葦、蘆、葎)ともいわれ、池、沼、川岸などの湿地帯に生える多年草で、茎は4~6mにも及び、河原では一番背の高い草です。晩秋から初冬にかけて銀色に輝く見事な穂を風になびかせる姿は秀逸です。川岸では、その下流域から汽水域上部、干潟の陸側に大きな茂み(ヨシ原)をつくりますが、多摩川では、六郷橋付近から河口干潟にかけて大きな広がりを見せています。水質浄化機能を持ち、鳥類、カニ、貝などの動物たちの生息場所ともなるヨシ原は、自然環境の保全にはなくてはならない重要な植物と言えます。撮影場所は、ユリカモメが第三京浜国道橋付近(野毛)の多摩川左岸河原、ヨシは東名高速道路橋付近(宇奈根)の多摩川左岸河原です。

Contents 目次

- 巻頭言
「水湧くプロジェクト」から
地域の再生へ 2
- 特別寄稿
カメに見る外来種問題 3
- 多摩川河口と子どもたち 4
- 多摩ニュータウンの川
大栗川 乞田川 5
- 野川との出会い そして今 6
- 財団からのお知らせ
助成研究募集のご案内 7

巻頭言

「水湧くプロジェクト」から地域の再生へ



三鷹市 副市長
河村 孝

三鷹市は、平成元年に、高度成長期に埋め立ててしまった「丸池」を復活させようという市民からの提案[まちづくりプラン]を受け、以来、その実現に向けた取組みを進めてきました。現在では、復活したその「丸池」を、「わくわく村」という市民組織が自主管理するなど、大きな進展を見せています。また、大規模な雨水浸透施設を地下に埋設した「水源の森あけぼのふれあい公園」の整備（平成10年）や各家庭への雨水浸透枳の設置（平成17年度末で約4万基）なども行っており、水循環や水辺空間の整備に向けた施策では、熱心な自治体とされています。

平成18年3月、三鷹市では、こうした取組みを背景に、隣接する小金井市や東京都とともに、自然や文化を復活させ地域の活性化や都市型観光の推進をめざす「水湧く（みわく）プロジェクト構想」をまとめました。プロジェクト全体の名称である「水湧く」という表現には、両市を流れる野川や仙川、玉川上水の「水」を共通項として捉え、文字通りの「水が湧く」に加えて、「魅力が湧く」や「わくわく（する）」という意味が込められています。

「水湧くプロジェクト」は、既に取組みが始まっている事業レベルのものから将来的な願望も含めたアイデアレベルのものまで、23の個別プロジェクトの集合体です。そこで、プロジェクト全体を、耕す、育てる、もてなす、という3つのステップに分けて段階的に推進することにしています。第一ステップでは、既に一定の取組みを行っており、プロジェクト全体のシンボル性を持って引っ張っていく「リーディング・プロジェクト」として、「紫草プロジェクト」、「湧水プロジェクト」、「江戸東京野菜プロジェクト」の3つのプロジェクトが選ばれました。（「紫草」と書いて「むらさき」と読みます）

「紫草プロジェクト」は、江戸時代の染め物「江戸紫」に使われ、玉川上水に架かる市内の「むらさき橋」の名称の由来にもなった、紫草を再生しようとするものです。紫草は、染め物の需要の減退とともに急激にその数を減らし、現在では環境省の「レッドデータブック」で絶滅危惧種に指定されています。

この「紫草プロジェクト」の推進主体は、三鷹商工会に設置された「地域ブランドの会」に参加している約70名の商工業者や市民であり、個人の宅地や理解を得た農家の畑で紫草を栽培し、更にはそれを原材料にした染め物づくりを行っています。今後は、例えば、小金井市にある東京農工大の繊維博物館との連携による商品化や更に発展したブランド化などへの取組みが想定されています。

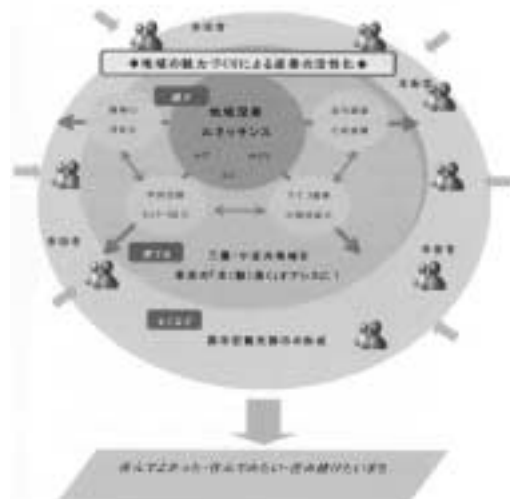
「湧水プロジェクト」は、商店街が中心となって、平成16年11月に武蔵小金井駅前の六地藏の敷地内で掘り当てた、飲用可能な井戸水を使った来街者への「美味しい水」のサービスなどを展開しようとしています。

「江戸東京野菜プロジェクト」は、小金井市内の市民グループが中心となって、伝統野菜の活用や地産地消、さらには郷土料理の復活など、多彩な食の楽しみへの取組みです。

紙幅の都合で全てを紹介はできませんが、この他の個別プロジェクトには、ファッションの視点から農に親しむ機会を増やす「都市ファーマー・プロジェクト」や農家の協力を得ながら食・農をテーマとした地域コミュニティの拠点形成する「フード・コミュニティカフェ・プロジェクト」などがあります。

「水湧くプロジェクト構想」のサブ・テーマは、「みず・みどり・江戸の記憶から始める地域深耕ルネサンス」です。今、文化や歴史、また湧水、川、緑などの自然環境、さらにはそれらを支える人のネットワークなど、あらゆる地域資源を「深く耕し」つつ、市域を越えた広域プロジェクトが動き出したところ です。

〔3つのステップによるプロジェクト推進イメージ〕



特別寄稿

カメに見る外来種問題



特定非営利活動法人
生態工房

理事 佐藤 方博

わたしたちの会は、保全活動のフィールドとして公園や保護区などの施設に注目しています。このような施設では、おそらく開発によって自然そのものが消失することはありません。ではその場所の野生生物が本当に守られているかという点、残念ながら違います。多くの施設では、不適切な利用、管理形態の変化、外来種の侵入によって生息地の劣化が進行しています。せっかく公共の緑地として確保されていても、野生生物の生息地として、また人々への環境教育の場としての機能が低くは意味がありません。生態工房はこういった施設を効果的に管理・活用するためのノウハウやモデルケースづくりを目指して設立されました。このような背景から、外来種の現況調査や駆除・抑制技術の開発には特に力を入れています。

今や都会で最も目に付くカメと言えばアメリカ生まれのミシシippアカミミガメ(ミドリガメ)。このカメ駆除技術の開発は、会の設立当初からの主要な活動です。在来のカメを追いやってしまっているこのカメは、実際にどれだけ生息しているのでしょうか。2003年に(財)日本自然保護協会が実施した「日本全国カメさがし」によれば、市民から寄せられたカメ類の目撃情報の62%がミシシippアカミミガメでした。在来種のクサガメは21%、日本固有のニホンイシガメは9%です。もはや在来のカメはこれしかいないのでしょうか？

わたしたちが井の頭公園(東京都三鷹市)の池で行ったカメ類調査では、双眼鏡で確認したカメ類の75%がミシシippアカミミガメで、クサガメはわずか8%でした。ところがわなを使って捕獲調査をしてみると、ミシシippアカミミガメ65%に対し、クサガメが28%と比率が変化していました。善福寺公園(杉並区)、光が丘公園(練馬区)でもほぼ同様の結果が得られています。ミシシippアカミミガメは日光浴や水面浮遊をしていて目に付きやすいのに対し、水棲傾向の強いクサガメは目視では捕捉しにくく、ニホンイシガメは生息数そのものが少ないのです。

東京の水辺にも意外と在来のカメが生き残っていることがわかりましたが、喜んではられません。

ミシシippアカミミガメの比率が在来カメ類に比べて圧倒的に高いのです。本種は雑食性で魚類、貝類、昆虫、水草などさまざまなものを食べています。都会の水の中は、40年前にはいなかった大型の捕食者が大量に存在している異常な状態なのです。

在来カメ類の動態も気がかりです。生息数が多いように見えても、それは文字通り「生き残っている」だけ、ということもあります。カメは寿命が長いので、姿が見えれば「まだ生息しているから大丈夫」と思われがちです。しかし肝心なのは世代交代をしているかどうかです。前述の調査地では、クサガメでは幼体や若齢個体が確認されていますが、ニホンイシガメは大型の個体ばかりでした。生息数が少ない上に繁殖していないとすれば、地域的な絶滅につながる可能性があります。捨てられた外来カメ類は、生きている間、数十年にわたって生態系に影響を及ぼし続けます。人の多い都会であれば、同じ種類のカメが何匹か捨てられて繁殖する可能性が高まります。カメ類は地中に産卵するので、それを効率よく発見する方法は今のところありません。回収するには、日数を費やして生体を捕り続けるよりほかないのです。捕まえた何百匹ものカメの引き取り手を探すこともできません。有効利用するすべもなく、永世飼養する保護施設もありません。これらの外来カメ類は、最終的には殺処分するよりほかないのです。

人間活動の増大とともに、都会の自然環境はもはや本来の姿そのものではなくなっています。生息している生物種を見ても、欠落してしまった種や、新たに定着した外来種がいます。わたしたちは、現在ある劣化した自然をそのまま残すのではなく、あるべき自然像を明確にして、その目標へと回復させていくことが大切だと考えています。捨てられた拳げ句に駆除される外来カメは不幸ですが、彼らに捕食されている在来の小動物や、種間競争を強いられている在来カメ類の未来を考えると、外来種の排除は避けて通れない課題なのです。



カメの捕獲調査(練馬区光が丘公園)

多摩川に学ぶ 多摩川河口と子どもたち



特定非営利活動法人
海辺つくり研究会

理事 五明 美智男

桜咲く4月に1年が始まる子どもたちと同じように、生きものたちにもそれぞれの季節がある。マハゼは、湾内で一生を過ごす東京湾を代表する魚である。湾内の干潟沖合で春先にふ化した後、泥干潟に着底して稚魚期を過ごし、夏には河口や埋立地周りに集まる。越冬した生き残りの大型マハゼと一緒に7～8cmサイズのものが釣れはじめ、9～10月には10～15cmの大きさとなって秋ハゼ釣りの盛期を迎える。この時期を過ぎると、産卵のために水深8～15mの沖合に移動し産卵巣を掘り、翌春の子どもふ化を助けて一生を終えるのが一般的である。「釣って楽しく食べておいしい」魚でもあり、多感な子どもの時期に自分たちの五感で触れるのに格好の相手である。本報では、マハゼを通じての多摩川河口と子どもたちの対面事例を紹介したい。

去る10月22日、多摩川河口の環境を体験と聞き取りによって記録する試みの1つとして、国土交通省関東地方整備局横浜港湾空港技術調査事務所との共催で、羽田空港拡張予定地周辺および台場付近でのマハゼ釣り調査を実施した。12人の子どもたちを含む62名が4隻の船に分かれ2時間半の調査に意気揚々と挑んだものの、参加者を喜ばせたマハゼの顔はわずかに3つ、4隻のうち判断早く拡張予定地の沖側に出た船が、ハゼ、シログチ、シロギスなど計28匹を釣り上げ一番船となった。こうした釣果の分析は別の機会に譲るが、参加してくれた子どもたちの楽しそうな姿がスタッフにとって何よりであり、将来も続くであろう自然体験の1つとして記憶に残ることを強く願いたい。また、何とか子どもたちに釣らせたいという船長の計らいに感謝し、釣果ゼロの大人に混じり船酔いせず釣果を出した子どもたちの活躍を賞賛し、「釣れなかったのが悔しい、また参加したい」という頼もしい言葉にスタッフも奮起していかなければいけない。

今回の調査では、釣果をあげると同時にマハゼの生態に関する理解、記録、さらにはマハゼを味わうといった

五感を刺激できるサブテーマを盛り込んでいる。榎瀬氏協力のもとマハゼの生態イラストや体長別・種類別・場所別に記載できる調査シートを用意し、計量を終えた後に、釣ったサイズの魚の数だけ色鉛筆で塗りつぶしていくデータ化作業を各自に実施してもらった。東京湾のマハゼは今や高級魚、昼食時に食されたマハゼの天ぷらは、調査前日に木更津付近へ出向いてくれた船宿の協力によるもう1つの自然体験でもあった。

当会では、平成14、15年にとくきゅう環境浄化財団より助成いただいたトビハゼの生息地調査を契機に多摩川河口での活動を継続している。羽田空港と隣り合わせの多摩川河口は、約138キロの旅の終着点かつ海の始まりの場であり、自動車工場の移転に伴って撤去された看板の残影と跡地にやってきたコアジサシが交錯するような移り変わりを続ける場でもある。都市域に残された汽水域独特の環境を見守るとともに、頭上を通り過ぎるジェット機による臨場感を楽しみながら子どもたちが五感で楽しめる機会を今後も提供していきたい。



東京湾に出港した調査船



調査シートに記入する児童

多摩川散歩

多摩ニュータウンの川 大栗川おおくり 乞田川こった



多摩ニュータウン誌
「あい」編集室

大栗川・郷土研究者
小林 宏一

丘を削って造成した多摩ニュータウンには自然は残されていないだろうと考える人がいるかもしれませんが。事実、ニュータウンの大部分を占める大栗川は、支流の乞田川、太田川と共に直線化された上にコンクリートで護岸され、蛇行して流れたかつての面影は見られません。一方、今では親水護岸や遊歩道に加え、川岸に植えられた桜並木は枝を川面に垂らし、みごとな景観を見せています。何より、流域のあちこちに残されている緑地と、そこから湧き出している流れが数多くあるので、水質も良く、小魚やカモ類、カワセミやキセキレイが見られる川となっています。しかも源流域にある緑地公園にはネイチャーセンターがあり、手軽に自然環境に触れられる利点があります。

今回は、源頼朝と関係の深い別所の蓮生寺から、水と里山に触れる長池公園へのコースをご紹介します。京王相模原線堀之内駅で下車。南北に走る広い通りを南下しますが、これがかつてカタクリの群落があった別所谷戸です。暫らく歩くと、社寺林のうっそうとした森が蓮生寺公園として保全されています。湿地や吊橋、展望台もあります。

その更に先の長池公園では、長池、築池、姿池を中心に、周囲に雑木林が広がり、たんぼや炭焼き窯などがあります。池には多くのトンボがすむようになり、年間40種類が観察されるまでになりました。野鳥も豊富です。ネイチャーセンターで話を聞くのもよいでしょう。帰りは、長池の豊かな湧水に沿ったせせらぎ緑道を行くと、もとの堀之内駅に出られます。水を身近に取り入れた住宅公団（現都市再生機構）の設計思想に触れられる気持ちの良い道です。

多摩ニュータウン以前の丘陵の歴史を訪ねることができるように、10コースに分けた手軽なガイドブック「多摩ニュータウンの歴史さんぽ道」ができました。分かりやすいイラストマップや年表などがついていて、資料としても楽しめます。多摩ニュータウンの書店で販売中（税込み300円）。遠方の方は切手400円同封の上お申し込みください。

連絡先 〒206-0034 多摩市鶴牧1-1-14-304
「あい」編集室 Tel & Fax:042-374-5688



長池公園里山体験ゾーンのたんぼ



ガイドブック「多摩ニュータウンの歴史さんぽ道」の一部抜粋

私と多摩川



野川との出会い そして今

小金井市環境市民会議
代表 平井 正風

世田谷区の兵庫島で多摩川の左岸に合流する野川は、全長 20km 足らずの小河川である。古多摩川が浸食した国分寺崖線の「はけ」からの湧水を集めて流れ、湧き水の川として人々に愛されている。



野川の風景(兵庫島)

昭和 59 年 6 月、都心の人ごみと空気の悪さに嫌気がさした私たち家族は、少しでもよい環境を求めて、中央線の武蔵小金井に引っ越すことにした。2DK のアパートの横には、歩道をはさんで野川が流れていた。当時の野川は、黒い水が流れ、悪臭がする「死んだ川」だった。引っ越した日の夜、網戸一面に無数のユスリカがとまっていた。ひょっとすると大変な所に引っ越してしまったのかなと思った。川には、ユスリカやイトミミズしかいなかった。しかしこの頃、下水道の普及とともに、野川の水質は、急速に回復し始めていた。

昭和 61 年頃、梅雨の晴れ間、野川沿いを散歩していたときのことだ。明るい陽射しに銀鱗をきらめかせて、100 尾程のギンブナの群れが溯上していくのを見た。私は川の生命力を感じて「この川は生きている」と思った。野川とのつきあいが始まった。

環境コンサルタント会社で海洋生物に関する仕事をしてきた私は、川の生物も勉強することになり、休日になると野川に入り、水生生物や植物を調べた。子どもたちと一緒に、川に入るたびに新しい発見が

あり、野川が命のきらめきを取り戻す様子を目の当たりにできたことは、とても幸せなことだった。野川をもっと良くしようと活動する人たちとの出会いもこの頃だった。「わんぱく夏まつり」や「野川ほたる村」などに入会し、野川を中心とした市民活動に参加することになった。以来 20 年、野川の生物を調べ続けるとともに、川の楽しさ、水の大切さなどを学び広める活動を続けている。

下の表は、小金井市内の野川で調べ続けた代表的な水生生物の変遷である。あまり正確な記録ではないが、水質の改善とともに汚れに強い種類(コイ・ミズムシなど)から戻ってきたことや湧水のひどかった年(昭和 62 年～平成元年頃)に多くのものが姿を消したことなどがわかる。

水生生物の変遷(小金井市内)

生きものの種類	昭和		平成									
	60	62	1	3	5	7	9	11	13	15	17	
	85	87	89	91	93	95	97	99	01	03	05	
イトミミズ類												
シマイシビル												
カワニナ											
サカマキガイ											
マシジミ											
ミズムシ											
ヨコエビ類											
スジエビ・ヌカエビ											
ミナミヌマエビ											
アメリカザリガニ											
コカゲロウ属											
ハグロトンボ											
シオカラトンボ											
アメンボ											
コガタシマトビケラ											
ニンギョウトビケラ属												
マルヒラタドロムシ属												
ブコ科												
ガガンボ科											
ユスリカ科												
タモロコ											
モツゴ											
オイカワ											
コイ											
ギンブナ											
ドジョウ											
ナマズ											
トウヨシノボリ											
メダカ												

— いたことが確認された時期ほとんど見られなかった時期

現在の野川は、大きな問題をかかえている。玉川上水の通水停止、家庭排水の流入減少、市街化による地下水と湧水の減少などを原因とする湧水である。小金井では、平成 2 年 9 月の湧水以来、毎年のように乾いた石ころだらけの川底が無残な姿をさらす。当然、生物量も大きく減少した。野川流域連絡会では、用水路の復活や雨水の一時貯留などの検討を進めており、小金井市環境市民会議では、地下水水位の測定を開始した。市民の熱意と行動が行政とも協働して、野川に豊かな水と命あふれる光景をよみがえらせる日を信じて活動を続けるつもりである。

財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための助成研究募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 清水 仁）は、1975（昭和50）年より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果、これ迄に463件（学術研究282件、一般研究181件）の調査・試験研究のお手伝いをさせていただきました。

2007（平成19）年4月からの助成についても、従来と同様、学術研究、一般研究とに分けて、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 助成研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査および試験研究

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

4. 助成の決定

2007（平成19）年3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

5. 応募締切日 2007(平成19)年1月15日(月)

6. 応募にあたっての注意事項

ご応募にあたっては、当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報の保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受け付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。
(次ページへ続く)



「雪の小菅村」

小菅村は縄文時代の石器が発見されるなど歴史は古く、また、鎌倉時代の建築様式の繊細で優雅な長作の観音堂が大切に保存され、神楽、獅子舞など民俗芸能も各地区に息づいている。

写真・文

中村 文明

なかむら ぶんめい

多摩川源流研究所 所長
山梨県塩山市在住

7. 助成研究の種別と条件 (前頁のつづき)

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	200万円
単年度の助成金上限額	200万円	110万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目 (1) 器具備品費 (2) 消耗品費 (3) 旅費 (4) 謝金 (5) その他	原則対象外、ただし所属機関・個人所有もなく、調査や試験研究に必要不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等 器機・設備などの賃借料、通信費、その他	
尚、学術研究へのご応募は、研究計画の全てが助成金によるものではないこと 旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%程度を上限の目安とすること、の2点に特にご留意下さい。上限の目安を大幅に超える場合は、その理由を詳細に記した説明書を添付し、申請書と併せてご提出下さい		

発行日 平成18年12月1日

編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuev>

